

■ 書 評



自閉症の心と脳を探る
一心の理論と相互主観性の
発達—

山本 晃 編著
星和書店
2019年1月 332頁
本体価格 3,300円+税

本書は、学校教育に携わる教諭、スクールカウンセラーなどの臨床心理士、精神科医などからなる13名の発達障害の専門家が執筆している。編者は40年近く小児精神医療に携わり、精神病理学的観点から自閉症を含めた発達障害に関する多くの書籍を上梓している。

本書は、全22章から構成され、「心の理論」「共同注意スキル」「感覚過敏」「中心性統合の障害」「ミラーニューロン」「相互行為的普遍性」「共感的模倣」「デカルト的省察」「他者の主観の排除と再構成」「周囲世界」「レンプの隣接実在」などたくさんキーワードが盛り込まれ、どれをとっても興味深い内容である。前半では、自閉症の子どもを対象とした数々の実験を詳細かつ具体的にわかりやすく紹介して、自閉症のメカニズムの1つとして考えられる「心の理論の障害」が臨床症状に反映する道筋を示している。結論だけではなく、今までに立てられた仮説やそれが実証されたり否定されたりと試行錯誤、紆余曲折しながら現在の段階までに至った過程を丁寧に解説しており、これから研究を志す者にとって、アイデアと勇気を与えてくれるであろう。後半では、自閉症の世界に対する理解を深めるべく哲学的な観点から論じている。凡人である私には難解な部分もあるが、じっくり読み込むことで、著者の主張が浮かび上がってくる。

共同著者の自験例4症例の提示では、実際どのようなかわりをしたのか機微にわたり記載さ

れ、自閉症児への対応の工夫が盛り込まれている。症例Aは35回の遊戯療法を交えた面接を通して「心の理論」を獲得した7歳男児、症例Bは6年間72回の継続した共感的模倣に焦点を当てた面接のなかで、対人関係能力の発達を促した高機能自閉症の8歳男児、症例Cは4年8ヵ月間で89回の面接介入を行い簡単な会話をするに至った7歳男児、そして、症例Pは、2年間38回の面接の中で空想遊びを通して対人関係能力の改善がみられた9歳男児である。どれも長期間のかかわりであり、並々ならぬ熱意と労力が必要であったことがわかる。ただ、自閉症児が確実にコミュニケーションスキルを獲得していく様子は、臨床家に勇気を与えてくれる。全例とも成功例であるが、現実にはなかなか変化せず、社会性を獲得できないこともある。欲をいえば改善がみられなかった症例の提示もあれば、自閉症児と対峙する治療者に別の角度から何かの指針を与えてくれたのかもしれない。

自閉症は他の精神疾患と比べ解明されていない領域が多く、児童精神医学の専門家以外は関心が低かった。しかし、最近では、大人の発達障害が注目を浴び、専門としない医師でも臨床場面で接する機会が増えた。自閉症に有効な薬物療法が見い出せない現状では、心理社会的介入が重要な位置を占めている。高機能自閉症であるアスペルガー症候群では対処方法をマニュアル化して教えることで、就労支援につながると言われているが、重度である自閉症では、心理的介入への効果が乏しいと悲観的になる傾向があった。しかし、最近の知見では諦めず早期にかかわることで、その後の社会的予後が改善されることがわかり、自閉症治療にも光明が射した。これからは、患者を取り巻く社会全体での取り組みが必要であり、医療従事者のみならず学校関係者を含めた多くの人にも本書を是非一読することをお勧めする。

(忽滑谷和孝)